

## 審査の結果の要旨

氏名 丸山正統

本研究は子宮内膜症患者の不妊症との関連を明らかにするため、手術療法を受けた子宮内膜症合併不妊症の妊娠成立に関する予後を調査しその有効性ならびにその機序を検討した。特に、卵管の癒着の程度と子宮内膜症の臨床進行期別の妊娠率を比較検討した。(研究1) また子宮内膜症患者に対する IVF-ET の成績を検討し、腹腔鏡施行時の腹腔内所見が IVF-ET 施行時の卵巣機能や妊娠予後とどのように関連するかを検討した(研究2)。下記に結果を示す。

### 研究1

1. 腹腔鏡治療後、対象を18ヶ月間観察した。卵管所見で卵管正常群、片側癒着群、両側癒着群に分類した。累積妊娠率は、卵管正常群と片側癒着群の間には有意差はなかったが両側癒着群の累積妊娠率は他の群に比べ、有意に低率で、両側卵管異常は妊娠率が低いことが示された。
2. 子宮内膜症患者の重症度別の妊娠率では、内膜症Ⅰ・Ⅱ期の患者に対し内膜症Ⅲ・Ⅳ期の患者で有意に低く、重症例に妊娠率が低いことが示された。
3. 子宮内膜症の臨床進行期による妊娠率を卵管癒着の程度で層別化し比較検討した。卵管正常群の累積妊娠率は内膜症の臨床進行期で差はなかった。片側癒着群ではⅠ・Ⅱ期の妊娠率がⅢ・Ⅳ期より有意に高く、非内膜症群はその中間の値を示した。同じ傾向は両側癒着群でも観察されたが、有意差はなかった。両側癒着群の癒着の程度による妊娠率を比較した結果、妊娠が認められているのは、癒着の程度が軽度の症例のみであった。以上より子宮内膜症患者の妊娠予後は卵管の癒着の程度に左右されることがわかった。

## 研究 2

1. HMG 製剤投与量の検討では内膜症性卵巢嚢胞両側核出群が他の群に比べて有意に投与量が多く、卵巢嚢腫核出により卵巢の HMG 製剤に対する反応性が低下することが示された。
2. 発育卵胞数、採卵数は片側および両側子宮内膜症嚢胞核出群で、非内膜症群に比べて有意に少なく、手術侵襲による影響が大きいことが示された。
3. 妊娠率に関する検討ではの子宮内膜症群全体の妊娠率は 76 例中 17 例 (22.4%) で非子宮内膜症群 (25.0%) と、ほぼ同等であった。子宮内膜症性卵巢嚢胞核出術で IVF-ET を施行するとゴナドトロピンに対する卵巢反応性の低下、発育卵胞数、採卵数が低下したが妊娠率に差はなく胚の質や着床には影響が少ないことが示唆された。

以上、本論文は不妊を訴える子宮内膜症例の腹腔鏡施行後の妊娠性率に関する予後は子宮内膜症の有無と進行期ならびに卵管癒着の有無の組み合わせにより影響されることが明らかになった。腹腔鏡施行後に妊娠しなかった患者に対する IVF-ET の成績は、子宮内膜症卵巢嚢胞を核出した卵巢でゴナドトロピンに対する反応性が低下していることが示唆されたが、最終的に妊娠率に対する明らかな影響は認めなかった。本研究は子宮内膜症合併不妊治療における腹腔鏡の有効性およびその治療機序を考える上で重要な研究であり、今後の子宮内膜症合併不妊患者の治療に対して大きな貢献を成すと考えられ、学位の授与に値するものと考えられる。